

DV 加害の認識が DV 脱却を促進するプロセスの解明

定者 光¹・大井修三²・宮本邦雄³

(1: くりきメンタルクリニック, 2: 岐阜女子大学, 3: 東海学院大学)

要 約

本研究では、DV 加害者が DV 脱却に向かう過程の中で、どのように DV の問題を意識し、向き合い、受け容れていくのかについて明らかにすることを目的とした。DV 加害者更生プログラムに通う DV 加害男性 4 名を対象に面接調査（4 名のうち 3 名は 3 回、1 名は 2 回）を行い、複線経路・等至性モデル（TEM）の手法を用いて分析を行った。その結果、DV 加害者が DV 脱却に向かう過程には、DV と気づかずに DV を繰り返す段階、葛藤の落としどころを模索する段階、現実に直面して DV を受け容れていく段階、家族との関係修復に向かう段階という四つの段階があることが示唆された。この DV 脱却の過程は、自分の DV が引き起こした現実に直面し、それまで当然のことと感じていた伝統的家族観に基づく態度や言動が当然のことではないと気づくことで、DV 加害を認識していく過程であった。DV 加害を認識していくためには他者からの指摘が有効であり、DV に関する知識、DV 加害者支援に関する情報を周知させることが重要であると考えられた。

キーワード：ドメスティック・バイオレンス（DV）、DV 加害者、DV 脱却

(2017. 9. 6 受稿 査読審査を経て 2017. 10. 23 受理)

問題

1. 社会問題としての DV

近年、ドメスティック・バイオレンス（Domestic Violence: DV）という言葉は、テレビやインターネットでも社会問題として頻繁に取り上げられるようになってきた。DV の定義は研究者や DV 被害者・加害者の支援者によって様々であるが、配偶者や恋人など親密な関係にある、またはあった者から振られる暴力のことである。山口（2001）は、親密な関係にあるパートナーに対して繰り返される暴力的で高圧的な態度と定義した。暴力という言葉は殴る蹴るなどの「身体的暴力」を連想させるが、DV には、人格を貶めるような言葉を浴びせる、物を破壊するなどの「精神的暴力」、望まない性行為や避妊に協力しないなどの「性的暴力」、厳しく支出をチェックし自由なお金を持たせないなどの「経済的暴力」、行動を制限するなどの「社会的暴力」も含まれる。そこで、本研究は、山口の定義に従って DV 現象を取り上げていくことにした。

内閣府男女共同参画局（2015）が 20 歳以上の男女 5000 人を対象に実施したアンケート調査によると、配偶者から何らかの暴力を受けたことがある者は 20.3%（女性 23.7%、男性 16.6%）であり、また、交際相手から何ら

かの暴力を受けたことのある者は 14.8%（女性 19.1%、男性 10.6%）であった。DV の問題は 10 代の恋人たちの間にも広がってきており（e.g. 横浜市民活力推進局、2008）、親密な関係にある相手からの暴力は年齢に関係なく、そして誰にでも起こり得る問題であるといえる。DV がエスカレートしていくと、最悪の場合には殺人にまで至ることもあり、日本の社会においてももはや無視できない問題となってきた。

日本では、DV が社会問題化してきたことを踏まえ、2001 年に DV 被害者の安全確保と DV 防止を目的に「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」（DV 防止法）が制定され、2004 年、2007 年、2013 年と改正が重ねられてきた。当初、暴力は身体的暴力のみを指していたが、2004 年の改正により精神的暴力や性的暴力も含まれるようになった。また、2013 年の改正では、対象範囲が夫婦間から同棲する交際相手にまで広がった。しかし、その内容は被害者の保護を中心としたものであり、DV 加害者（以下、加害者）に対しては「加害者の更生に関する調査研究の推進に努める」に留まっている。

このように日本では、これまで被害者救出に焦点が当てられ、その対策が社会的に進められてきた。被害者の身の安全を図るための方法としては、加害者との別離を

勧められることが多く、インターネットや本などのメディアでも、被害者は加害者から離れるべきだと語られるものをよく見かける。また、被害者女性を対象にした研究にも、加害者から逃れることを前提としたものは多い（e.g. 武内・小坂, 2010）。

しかし、加害者の優しい面に期待し、加害者から離れるという選択ができない被害者や、繰り返されるDVに慣れ、自分がDVを受けているということを自覚していない被害者もいる。孤独になる恐怖や片親として生活することの困難さなどがDVの関係を継続させる一因となり、加害者から離れては戻るということを繰り返している場合もある（Walker, 1979）。このように、加害者の元から離れるようにというメッセージは被害者の気持ちや現状に沿っていないこともあり、支援が難しい面でもある。

もちろん、被害者の保護や支援はDV問題を取り扱う上で欠かせない。しかし、それだけではDVの問題は解決していかないように思われる。また、被害者への支援のみで加害者側が変わらなければ、そのことは新たな女性被害者となることを意味する（草柳, 2004a）。被害者が加害者から別れることができたとしても、加害者は次のパートナーを見つけ、そこでDVを繰り返してしまう可能性は高いと予想される。すなわち、DV問題の根本的解決のためには、加害者の問題についても精力的に取り組む必要がある。

2. DV 加害者に関する研究

加害者の研究は、1970年代後半からアメリカを中心に、主に臨床領域において行われてきた（e.g. Dobash & Dobash, 1979）。加害者の類型化や、DV加害発生メカニズム、暴力的パーソナリティが発生する要因についての研究など、さまざまな研究が加害者の理解や支援に役立てられてきた。日本でも、数は少ないものの加害者に関する研究は進められている。例えば深澤・西田・浦（2003）は、加害者の自己評価の高さや攻撃性の強さ、両親間の暴力の目撃などが、加害者の恋人や配偶者への暴力を促進していることを明らかにした。DVの世代間連鎖はいくつもの先行研究で指摘されており、例えばO'Keefe（1997）は、子どものときに両親間の暴力を目撃したこと、親からの暴力被害を経験することなどが、デートDV加害と関連していることを示した。親のDVを同居する子どもが目撃する可能性は高く、場合によってはその暴力が子どもに向かうこともある。子ども自身

をDV目撃から守るためにも、そして子どもが将来加害者となり新しい被害者を生まないためにも、今起きているDVの被害を食い止め、加害者への支援や対策を行っていく必要があるといえる。

3. DV 加害者に対する支援

アメリカにおけるDV加害者更生プログラム（以下、プログラム）は、1977年にDV被害者支援を行っている人々の関係者によって始められた（Adams & Cayouette, 2002）。DV被害者支援のためのホットラインに加害者男性から助けを求める電話が増え始めたことにより、加害者男性に対する再教育介入プログラム『エマージ』が創設され、実施されることとなったのである。プログラムへの参加は、裁判所命令によるものが一般的となっている。パートナーへの暴力のあった加害者に対し、刑罰ではなく保護観察処分とし、その条件としてプログラムに参加するというケースである。そのため、参加者のモチベーションが低く、プログラムを終了しさえすればいいと考える加害者もあり、問題点として指摘されている。

日本では、草柳（2004a）、山口（2001）、信田（2011）らを中心に加害者臨床や研究がすすめられてきた。日本で実施されるプログラムは、アメリカやカナダで実施されているものを参考に、実施者によってアレンジが加えられている。しかしながら、実際に利用されているプログラムは学会などの研究の場で議論されることが少なく、どのようなプログラムが効果的かの評価は経験則に任されているものが多い。

現在日本のプログラムに参加する加害者は、それぞれの事情の中で自ら必要性を感じ、自己変革をはかろうとする男性が対象となっている（草柳, 2004a）。加害者自身の自主性が求められるため、参加人数はまだまだ少ない。その分、「変わりたい」という気持ちが強く、モチベーションの高い者が参加していると考えられる。そのため、科学的根拠に基づいて検討されたプログラムが構築・実施されることで、プログラムの効果はより大きくなることが期待できる。

4. DV 加害者更生プログラムの効果

プログラムの効果については、さまざまな意見が交わされている。Gondolf & White（2001）は、プログラムに参加した加害者618名について30ヵ月の追跡調査を行い、加害者のパートナーの報告に基づき41%の加害者が再度暴力をふるったという結果を報告した。一方で、

Dutton, Bodnarchuk, Kropp, Hert, & Ogloff (1997) は 446 名の加害者を 11 年間にわたって追跡調査し、逮捕記録から、再犯率は 18%であることを報告した。Lee, Sebold & Uken (2003) は解決志向アプローチを用いたプログラム終了後の再犯率が 16.7%であることを示し、プログラムの経験によって言語や腕力による暴力行為が減少したことを報告した。研究によって再犯率に大きく違いがあるが、これは検証方法によるものとも、プログラムによって効果が異なるためとも考えられる。

Dobash, Dobash, Cavanagh & Lewia (2000) は、プログラムに通う男性を対象に「男性の暴力は変化するか」を明らかにしようとした。その結果、プログラムの実施によって暴力を完全に止めることはできないが、暴力指標としては減少がみられると報告した(中村, 2002)。このようにプログラムは、加害者へのアプローチとしては一定の効果があるといえる。であれば、一人でも多くの加害者がプログラムに参加するための体制を整えるとともに、科学的根拠に基づくより効果的なプログラムを開発することが重要となる。

5. DV 加害者の変化のプロセス

より効果的なプログラムを開発するためには、プログラムに参加した加害者が、プログラム参加過程でどのような変化をたどるのかを明らかにする必要がある。Dutton & Golant (1995) は、加害者が暴力から抜け出すプロセスを解明するために、Prochaska, DeClemente & Norcross (1992) の行ったアルコールや煙草などの依存症からの解放に関する研究を取り上げ、加害者に対しても応用できると考えた。Prochaska et al. (1992) は、依存からの解放について、前進と後退を特徴とする 6 段階から構成される螺旋状の過程をたどることを指摘した (Transtheoretical Model: TTM)。6 段階とは、問題意識のない「前熟考期」、問題意識を持つが実際に行動に移すことには消極的な「熟考期」、問題に対処しようと徐々に変化をもたらすための行動を取り始める「準備期」、問題解決のために積極的に行動へ移す「実行期」、これまで行ってきた変化を維持する「維持期」、そして変容した自己が再構成される「終結期」である。

TTM は物質依存からの解放を念頭に研究されており、行動の変容に重点が置かれている。問題意識のない段階から問題意識を持つという段階を経て、問題行動が減少していく変化のプロセスは、加害者にも当てはまる。しかし、DV はパートナーに対する態度のことであり、行

動の変容のみに注目した TTM は、加害者の変化にみられるプロセスの説明としては不十分である。それに対して、Gondolf (1987) は発達モデルの立場から加害者の変化のプロセスを「否認」、「行動変容」、「自己変容」の 3 段階に分け、後期にはより省察的・内省的な手法が必要であることを報告した。Gondolf (1987) のモデルは加害者の「DV 脱却」について、ただ DV をしなくなるという行動の変化だけでなく、自らの他者に対する振る舞いを振り返る中で加害者の態度が変化するところまでを含めて考えるべきであることを示した。

同様の分析は日本でも行われた。草柳 (2004b) は加害者への取り組みをまとめ、その経験から、加害者に生じる変化のプロセスには五つの時期があることを明らかにした。五つの時期とは、自らの暴力の存在を認めず繰り返す「暴力のサイクルの時期」、これまで自明のことと思いついてきた価値観が揺るがされる「ショック期」、これまでの自分の振る舞いが間違いだったと受け止め自分を責める「自己否定の時期」、生き直しに手ごたえを感じ、事を早く進めたい「建設期」、家族の再統合または別離を受容する「再出発期」であった。草柳は、「ショック期」でショックな出来事を受け止め、これまでのパートナーや子どもとの歴史を根本から考え直すかどうか、DV 脱却の分岐があることを指摘した。

これらのことは、加害者が DV 脱却に向かうために必要な支援が何かということを示唆している。自分の非を認めたくないという心理は誰にでもあり、加害者も例に漏れない。そのため、加害者の多くは自分の態度や言動を DV とは認識しておらず、どんなに非情な DV を行っても自分の態度や言動は正しいと感じている。つまり、加害者が DV 脱却へ向かうためには、加害者自身が自分の態度や言動に違和感をもつこと、パートナーを傷つけていたと認識することが重要となってくるのである。そのような変化のきっかけとなる出来事として、Riesen (2006) は「パートナーによって気づかされた体験をしたこと」や「自分の行動を振り返り、自分が間違った行動をしていることに気づいたこと」、「道徳的な悩みに直面したこと」などがあると報告し、内省の必要性を示した。また Stefanakis (1998) は、加害者の省察・内省が促される要因として公的・社会的制裁などの危機の体験があり、DV 脱却のためにサポートしてくれる人との関係も加害者が変化するきっかけを得る上で重要であることを指摘した。

このように加害者の変化のプロセスはいくつかの段階

に分けられ、その段階ごとの特徴や、加害者の認識が変わるきっかけとなった出来事について明らかにされてきた。しかし、加害者が実際にどのような認識をもちながらそのプロセスを辿るのか、どのように新しい段階へと繋がっていくのかといった点については、あまり検討されていないように思われる。

加害者の変化のプロセスに関する研究も、アメリカやカナダなど諸外国を中心に行われている (e.g. Gondolf, 1987)。草柳 (2004b) のように日本での研究も細々と進められているが、それらは研究者自身の経験則に基づいて行われていることも多く、客観的事実を踏まえて進められてきたとは言いがたい。またプログラムについても、日本の文化に合ったものであるかなど検討不足な面を多く残している。そのため、現在利用されているプログラムを一般化して他の加害者に実施することや、プログラムの有効性や適用範囲、限界や課題などを検討することを難しくしている。日本においてより充実した DV 加害者支援を行うためには、科学的根拠に基づいたプログラムの更なる検討と構築が必要である。

目的

DV 加害者更生のためのプログラム内容を科学的に検討していくためには、まず、現在プログラムを受けている加害者がどのように変化してきたのか、その実態を明らかにすることが必要である。そこで本研究では、プログラムに参加している加害者が、プログラム参加の中で DV の問題を意識し、向き合い、受け容れていく過程を、加害者に起きた出来事や支援、その時の気持ちに基づいて明らかにし、DV 支援の効果的な方法や、今後必要な予防策について具体的に検討するための手がかりを探ることを目的とした。

なお本研究では、加害者が男性、被害者が女性である場合に焦点を絞って検討を行うこととした。これは、DV において男女双方が加害者または被害者となりうるものの、男性が加害者、女性が被害者になる場合が多い (内閣府男女共同参画局, 2015) ためである。また、プログラムへの参加は 95%が既婚者であるという報告もあることから (内閣府男女共同参画局, 2016)、本研究では既婚者を対象に検討を行うこととした。

本研究における分析方法

本研究では、面接の内容から、加害者がプログラム参加の中で DV の問題を意識し、向き合い、受け容れてい

く過程を、加害者に起きた出来事や支援、その時の気持ちに基づいて明らかにすること目的とした。そのために、複線経路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) の手法を用いて分析を行うこととした。TEM とは、人間を開放システム (それらを取り巻く外界・環境との交換関係を抜きにしては存在し得ないシステム) として捉え、時間を捨象せず個人によって経験された時間の流れを重視し、人間の発達や人生経路の多様性と複線性を記述するための方法論である (安田・サトウ, 2012)。TEM を構成する中心的な概念には、非可逆的時間 (Irreversible Time), 等至点 (Equifinality Point: EFP), 分岐点 (Bifurcation Point: BFP), 経路 (Trajectory) がある。非可逆的な時間の流れの中で生きる人の行動や選択の経路は複数存在すると考えられるが、どこまでも末広がり的に経路が存在するというわけではなく、歴史的・文化的・社会的に埋め込まれた時空の制約によって、ある定常状態に等しく (Equi) 辿りつく (final) ポイントがある。それが等至点 (EFP) であり、経路が発生・分岐するポイントは分岐点 (BFP) と呼ばれる (安田・サトウ, 2012)。DV の理解と認識がどのように進んでいくのか、DV の理解と認識を促す出来事としてどのようなことがあったのか、その出来事に対して加害者は何を感じたのかなどを、結婚から現在までの時間的变化の中で捉えるためには TEM が有効であると考え、採用した。

方法

1. 対象者

DV 被害の経験があり、現在 DV 加害者更生プログラムに通う男性 4 名を対象とした。プログラムを実施する DV 被害者・加害者更正支援団体 (以下、支援団体) の責任者に協力を要請し、変化のみられる DV 加害男性として紹介された者達であった。プログラム参加期間は 4 ヶ月～2 年 2 ヶ月と幅があったが、自分の DV 加害と向き合い受け容れていくために必要な期間は人それぞれであること、そこに辿りつくための経緯を振り返って語ってもらうことが目的であることから、全員を対象とした。A (40 代後半) 男性

結婚年数 20 年 (別居)。プログラム参加期間 2 年 2 ヶ月。子どもの頃に母親から物で叩かれるなどの体罰を受けた経験がある。性役割観から家事などはしなかった。

B (40 代後半) 男性

結婚年数 17 年 (別居)。プログラム参加期間 9 ヶ月。両親はよく喧嘩をしており、父親がテーブルをひっくり

返したり、お互いに叩きあったりする姿を見て育った。また、自身も父親から叩かれるなどの暴力を受けた。女性が家事を行い、父親が家庭で威張ることは当たり前という性役割観、家父長制的な考え方をもっていた。

C (40 代後半) 男性

結婚年数 3 年 (別居)。プログラム参加期間 10 ヶ月。高機能自閉症の診断、うつ病の既往歴がある。男性にとって家庭は脳を休める場であり、家事は妻がするものだという男尊女卑の考え、性役割観をもっていた。

D (50 代前半) 男性

結婚年数 13 年 (別居)。プログラム参加期間 4 ヶ月。軽度のうつ症状がある。また、プログラムのファシリテーター (以下 FT) からアスペルガー症候群の疑いを指摘されていた。主婦は家事をするものだという性役割観をもっていた。自分の生き方に違和感を持ち、自助グループに参加した経験がある。

2. 調査時期と方法

2014 年 7 月～12 月に、1 人 2 回～3 回の半構造化面接を実施した。対象者から許可を得て、面接内容の録音、支援団体の事務所に保管してあるカルテの参照を行った。

3. 面接時間と回数

1 回 60～120 分の面接を実施した。面接時間の合計 (1 回目, 2 回目, 3 回目) は, A が 300 分 (100 分, 100 分, 100 分), B が 340 分 (110 分, 120 分, 110 分), C が 200 分 (60 分, 80 分, 60 分), D が 240 分 (120 分, 120 分) となった。

C はうつ病のため長時間の面接を控えるよう FT から要請があり, 1 回の面接を約 60 分とした。D はうつ症状のためにプログラムを欠席しており, 3 回目の面接を実施できなかった。しかし 2 回目までに得られたデータだけでも十分に分析が可能と考え, 分析に加えた。

4. 面接場所

面接は, プログラムが行われている事務所, またはその近隣の事務所の 1 室で実施された。研究者, 対象者双方の安全に配慮し, 隣室でスタッフに待機してもらった。

5. 面接内容

実施された 3 回の面接内容は毎回異なっていた。1 回目は, 対象者の現在までのおおまかな流れを把握するために, カルテの情報を基に簡単な TEM 図を作成し, 質

問内容を決定した。暴力被害の経験, DV という概念を知った時期, パートナーとの関係の始まりからプログラムに参加するまでの経緯, プログラムに参加してからの自分の変化, これまでに受けたサポートや周りからの影響, 現在の自分の状態などについて質問をし, それぞれについて対象者に自由に語ってもらった。対象者の発言には随時質問を返し, 内容の確認を行った。2 回目は, 1 回目で得られた情報を基に作成した時系列表の確認を行った。また, 1 回目の面接で聞き漏らしたことや, 新たに浮かんだ疑問について尋ねた。3 回目は, 訂正した時系列表と 1, 2 回目の面接から得た情報を基に作成した TEM 図を対象者に示し, 確認を行った。パートナーとの関係性の変化などについての質問を行った。

6. 分析と TEM 図の作成

毎回, 面接終了後に録音したデータを基に逐語記録を作成した。逐語記録を基に, 1 回目の面接終了後では, DV の内容, 出来事, 感じたことを抜き出してカードを作成し, それを基に時系列表を作成した。2 回目の面接では時系列表の修正を行った。また, 時系列表から DV 脱却に向かうプロセスとして重要と思われる出来事を抜き出し, TEM 図を作成した。3 回目の面接終了後は時系列表, TEM 図の修正を行った。作成した TEM 図を用いて, 加害者が DV 脱却へ向かうプロセスについて検討した。さらに, 対象者ごとの TEM 図を一つにまとめ, 各事例の比較を行った。

7. 本研究における TEM の枠組み

草柳 (2004b) によると, 加害者が自分の周りで起きている問題を自分の責任として受け止めることが, DV 脱却へ向けた変化をもたらす契機となる。そのため, 本研究では〈自分の態度や言動が DV だったと受け容れる〉を等至点 (EFP) に設定した。EFP の反対極にあたる両極化した等至点 (P-EFP) は, 〈自分の態度や言動が DV だと受け容れられず, 繰り返す〉とした。対象者の経路の共通点から, 〈パートナーとの関係の亀裂に DV を意識する〉, 〈DV について検索する〉, 〈DV 加害者更生プログラムに参加する〉, 〈他の人と自分を比べる〉, 〈自分を客観視できるようになる〉は, 〈自分の態度や言動が DV だったと受け容れる (EFP)〉に至るまでに必ず通る点と考えられたため, 必須通過点 (OPP) とした。また, 自分の態度や言動は「DV かもしれない」という思いと, 「DV ではない」という相反する思いによって葛藤が起

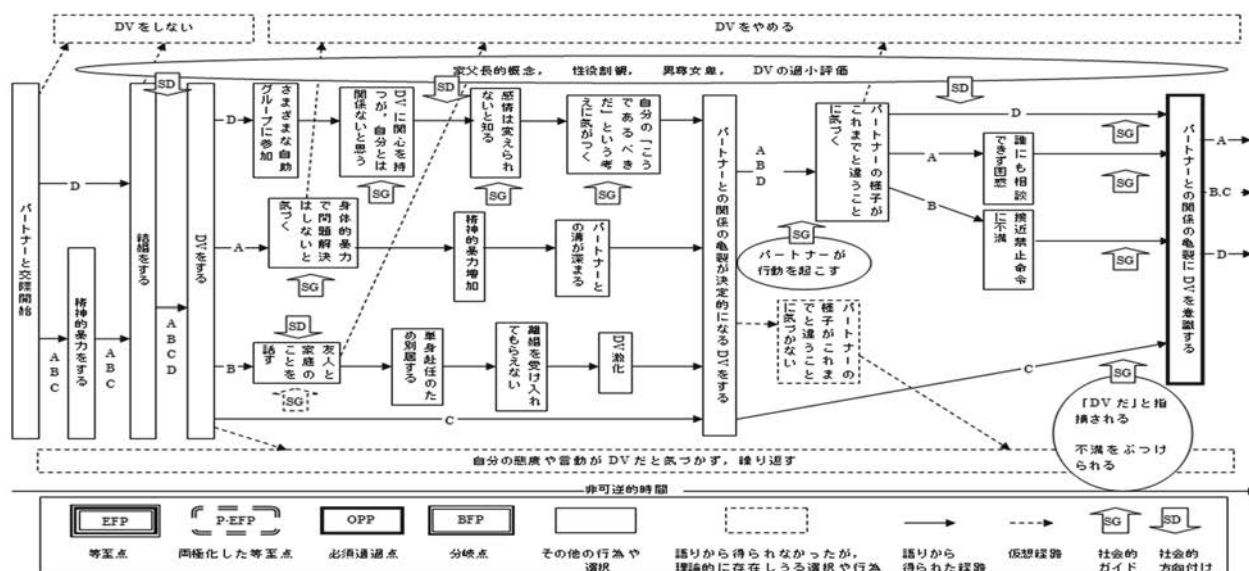


図 1-1 第 1 段階 DV と気づかずに DV を繰り返す段階

きた際、「DV かもしれない」という思いに目を向けていく事が〈自分の態度や言動が DV だったと受け容れる (EFP)〉へ向かうためには重要と考えられたため、〈葛藤〉を分岐点 (BFP) とした。そして、DV からの脱却へ向けた選択や行動を促す働きをしていると考えられたものを社会的ガイド (SG)、反対に、DV を繰り返すなど、脱却を阻害する働きをしていると考えられたものを社会的方向づけ (SD) とした。

8. 倫理的配慮

調査対象者及びプログラムを実施している支援団体から研究協力の承諾を得て実施した。調査に協力した際のメリット・デメリットを含めた詳細な配慮事項を書面にて示し、同意書への署名をもって承諾が得られたものとした。なお、本研究は東海学院大学倫理審査委員会の承認を得て行われた。

9. 研究協力を依頼した支援団体

研究協力を依頼した支援団体では、米国カリフォルニア州認定のプログラムを応用したグループワークを行っている。プログラムは、DV とは何か、被害者について、自分の過去を見つめる、態度行動を変える、いい関係を築くという五つのテーマから構成されており、力で支配するという間違っただけの考えを改め、平等という新しい価値観を身につけることを目標に実施されている。参加を希望する加害者は、FT とのインテーク面接後、週 1 回のプログラムに継続的に参加する。

結果

対象者 4 名の変化を一つの TEM 図にまとめ、分析を行った(図 1-1, 1-2, 1-3, 1-4)。対象者の DV 加害に対する認識に注目し、DV 加害の認識に変化が見られたポイントを一つの区切りとした。その結果、加害者の DV 脱却に向けた変化のプロセスは、四つの段階に区分されることが妥当と考えられた。第 1 段階は DV と気づかず DV を繰り返す段階、第 2 段階は葛藤の落としどころを模索する段階、第 3 段階は現実的に直面して DV を受け容れていく段階、第 4 段階は家族との関係修復に向かう段階であった。第 3 段階までは自己変容、第 4 段階は家族関係修復の段階と考えられた。

TEM 図は、DV 脱却へ向かうプロセスの中でも特に重要と考えられたものに焦点を当てて作成された。図の上方に行くほど DV 脱却に向かい、図の下方に行くほど DV 脱却からは遠い状態にあることを示している。

1. DV と気づかずに DV を繰り返す段階

対象者 A, B, C は、パートナーとの交際期間中から怒鳴る、否定的なことを言うなどの精神的暴力を行っていた（図 1・1）。

結婚後、A, B, Cは怒鳴る、パートナーを否定するなどの精神的暴力を継続し、さらに、暴力内容には程度の差があるものの、身体的暴力もするようになった。その頃からDは、精神的暴力を行うようになった。これらの背景には、男尊女卑、性役割観、家父長制的な考え方があった(SD)。そのため、加害者は自分たちの振る舞いを当然のことと捉え、過小評価していた(SD)。

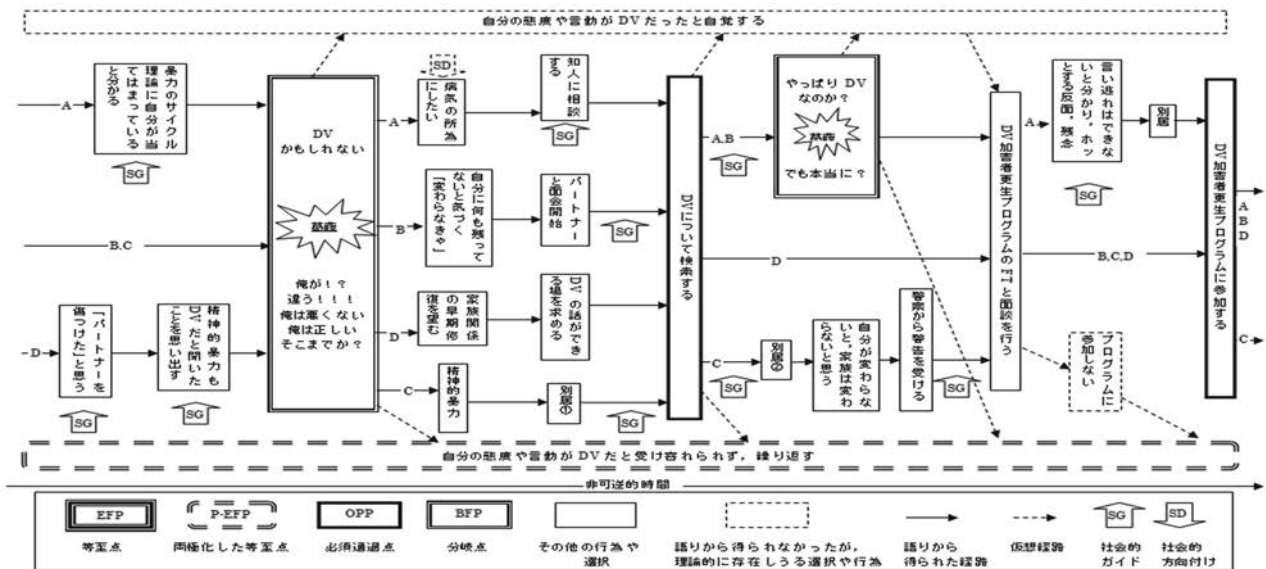


図 1-2 第 2 段階 葛藤の落としどころを模索する段階

全員が DV という言葉についてはテレビや新聞などで聞いて知っていた。ところが、DV は痣がでたり、骨折をしたり、入院したりする必要があるほどの身体的暴力が継続してふるわれることだと理解しており、自分とは関係のない話だと捉えていた。また、B は友人に家庭の話をするのがあったが、その場では B の考えや態度は肯定された。

A は、自分の経験から暴力で訴えても問題は解決しないということに気づき、身体的暴力をしなくなったが、精神的暴力は増えた。一方で B、C は、離婚をするため (B)、話を遮るため (C) といった、自分の目的を達成するために DV を継続し、身体的暴力も精神的暴力も激しさを増した。

ある DV をきっかけに、A、B、D のパートナーは、親に連絡する (A)、接近禁止命令を申し立てる (B)、挨拶を小声でする (D) といった、これまではなかった行動を起こした (SG)。これにより A、B、D はパートナーの様子が変わったことに気づいたが、「なんとか治まらないかな (A)」「何で 1 回暴れただけで (B)」「どうしたんだろう (D)」と思うだけで、重大な出来事とは捉えていなかった。

その後、A、B、C はパートナーから直接「DV だ」と指摘されたことで (SG)、D はパートナーからこれまでの不満をぶつけられ (SG)、パートナーを深く傷つけていたと気づいたことで、自分の態度や言動、パートナーとの関係の亀裂に DV を意識するようになった (OPP)。

以上より、第 1 段階を DV と気づかずに DV を繰り返す段階とした。

2. 葛藤の落としどころを模索する段階

図 1-2 に第 2 段階の TEM を示した。A は、パートナーから DV だと指摘された際、暴力のサイクル理論の特徴とも当てはまっていることを指摘された (SG)。DV だと指摘されただけでは納得いかなかったが、パートナーが「蓄積期」「爆発期」「ハネムーン期」などの専門用語を使って説明したため、「こいつ勉強してる」「負けた」と感じた。また D は、パートナーからこれまでの不満をぶつけられ、パートナーを傷つけてしまっていたことに気づいた。そして、言葉の暴力も DV に含まれることを思い出し、「自分がしていることは DV なのでは」という思いが芽生えた。

全員が「自分は DV ではない」と否定するものの、「DV かもしれない」という気持ちも心の隅に芽生え、葛藤が起きた (BFP)。自分の態度や言動が DV と評価されることに抵抗を感じながらも、パートナーから繰り返し指摘されたり (B)、友人から病気ではないと言われたりする中で (A)、少しずつ「DV かもしれない」という気持ちを強めていった。一方で、C はその後も精神的暴力を繰り返した。

A、C は自分の態度や言動が本当に DV なのかを確認するために、B、D は近くのプログラムを探すために、それぞれが DV に関する情報を得ようとインターネットで検索した (OPP)。その際、A、B は自分のこれまでの態度や言動が、DV の定義に当てはまっていることに気づき、再び葛藤が強くなった (BFP)。C は言葉の暴力が DV に含まれることを知るが、自分のこととしては理解ができなかった。しかし、パートナーが家を出ていっ

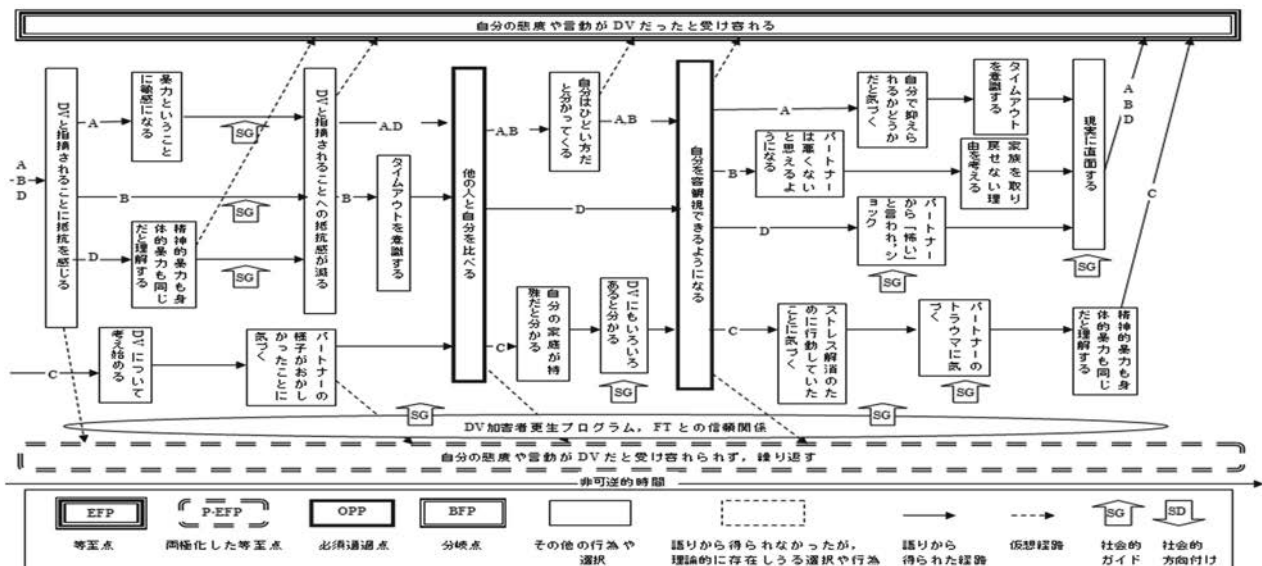


図 1-3 第3段階 現実に直面してDVを受け容れていく段階

たことで、自分も変わる必要があるのではと思うようになった。

全員が、パートナーを含めた家族との関係を取り戻したいという気持ちや、変わらなければという意識を持ち、この段階でプログラムに参加した（OPP）。

以上より、第2段階を葛藤の落としどころを模索する段階とした。

3. 現実に直面してDVを受け容れていく段階

プログラムに参加したものの、A, B, Dは「自分はそんなにひどいことをしたんだろうか」「パートナーも悪い」という抵抗を感じていた（図1-3）。しかし、プログラムでDVについて学びながら、FTや他の参加者からDVを指摘され、自分の考えに共感してもらえないという体験をした（SG）。A, B, Dは「私が異常なのか（A）」、「DVなのか（B）」、「考えを押し付けていたかも（D）」と、これまでの自分の態度に疑問を持つようになり、プログラムを継続するうちに抵抗感は低下した。一方Cも、これまでの自分の態度や言動、パートナーと別居に至った理由について振り返ることができるようになった。

A, Bは他の参加者と自分を比べ、「自分のしてきた言動はひどい方だ」と思うようになった。そのことにより自分の態度や言動はDVだったとの認識が強まり、自分を客観視できるようになった（OPP）。C, Dも、プログラムで他の参加者の話を聞く中で他の人と自分を比べようになり、「同じところがあるからDVなのかもしれない」と自分を客観視できるようになった（OPP）。

自分を客観視できるようになると、A, Bは「自分で

自分を抑えられるかどうか重要だ（A）」、「パートナーは悪くない（B）」と考えられるようになった。また、プログラムで紹介された「タイムアウト（休憩する、気持ちを落ち着かせる、人の話を一旦受け止める）」を普段から意識して使うようになった。パートナーとは別居中のため、実践は会社で行われることが多かった。タイムアウトを意識すると、「これは言ったらいけない（A）」、「さっき怒ったのはいけない（B）」と振り返り、反省できるようになった。そして、徐々に感情を抑制できる頻度も増えた。

プログラムに参加し、自分の態度や言動がDVであると呑み込めてきた頃、離婚を持ち出される（A）、パートナーの本音をぶつけられる（B）、別居となる（D）といった現実へ直面したことで、また、言葉の暴力もDVだと理解したことで（C）、自分の態度や言動がDVだったと受け容れる（EFP）ことができた。

以上より、第3段階を現実に直面してDVを受け容れていく段階とした。

4. 家族との関係修復に向かう段階

第4段階において（図1-4）、自分の態度や言動がDVであることを受け容れた加害者は、新しい目標を設定し（A）、家族との関係を取り戻すために自分に何ができるかを模索し始めた（B, C, D）。

Aは子どもとの関係を築くため、Bは家族の信頼を取り戻すためにプログラムを継続し、どちらも子どもと連絡を取れるようになるという進展があった。Bは子どもとの距離を埋めるために面会頻度を増やしたいと望んだ

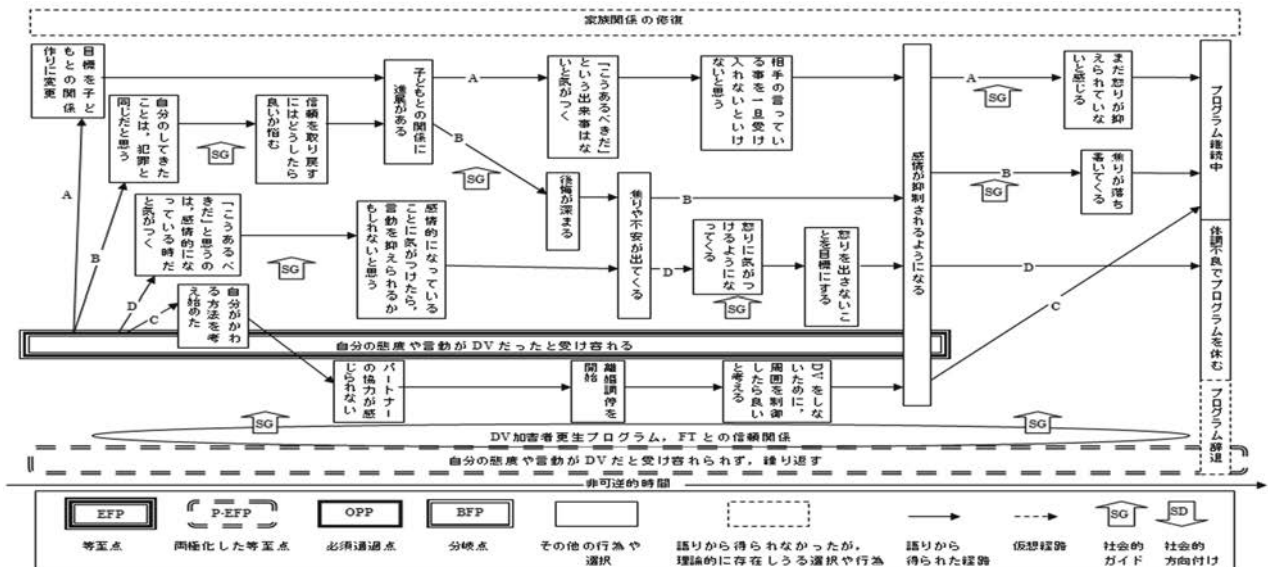


図1-4 第4段階 家族との関係修復に向かう段階

が叶わなかった。そのために、「なぜDVをしてしまったのか」という後悔が強くなっていた。一方、Aは子どもとの関係の進展が緩慢なことから、「絶対こうでなくてはならないということは世の中にはない」ということや、相手の言い分を一旦受け止めることが大切だということに気づいていった。

Dは精神的暴力をするときの自分の考え方の特徴に気づき、どうしたら改善できるかを考えるようになった。Cはパートナーとの関係修復のためにパートナーの意見に耳を傾けようとするなど、自分にできることを考え始めた。また、子どものために再同居を提案した。けれども、パートナーが自分に歩み寄ろうとしていないと感じ、離婚調停を申し立てた。そこには、離婚調停をきっかけにパートナーに変わって欲しいという意図もあった。

全員が家族の誰かと何らかの形で関係を持ちたいと望むが、なかなか思うように関係が進まないことが多く、焦りや不安を抱えていた。また、感情的にならないことが課題であると考え、感情を抑制していくという過程をたどっていた。その中でBは、子どもに会えることも喜べないほどに感情の起伏がなくなっていった。

以上より、第4段階を家族との関係修復に向かう段階とした。

考察

本研究の目的は、DV被害者更生プログラムに参加している加害者が、自分のDVの問題を受け容れていく過程を、加害者に起きた出来事や支援、その時の気持ちに基づいて明らかにし、DV被害者支援の効果的な方法や、

今後必要な予防策について具体的に検討するための手がかりを探ることであった。多くの先行研究で加害者の内省の必要について指摘がされてきたが、これまで明らかにされてきた加害者の変化のプロセスは、DVをしなくなるという行動の変化に焦点を当てて区分されているものが多く、どのように内省が進められていくのかを分かっていくように思われる。そのため、本研究は加害者のDV被害に対する認識に焦点を当て、変化のプロセスを検討した。

以下に各段階の特徴をまとめ、考察する。

1. 加害者がDV脱却に向かうプロセス

1) DVと気づかずにDVを繰り返す段階

結婚後、全員が精神的暴力を中心にDVをしていた。その背景には、家父長制的思想や男尊女卑の考え方、家事は妻がするものであるという性役割観があった。このような伝統的な家族観のもとでは、家族を一つの単位として考え、一人ひとりの人権が大事にされにくい関係がつけられやすい。また、男性優位の考え方は男性が女性を支配するという構図になりやすく、DV発生の一因となった可能性が示唆された。また、パートナー間でトラブルが起きた時もただの喧嘩と捉え、DVの問題を軽視していた。そのため誰かに相談することもなく、DVの問題が家庭内に留まってしまい、支援を受けにくい状況ができていたと推測できる。Prochaska et al. (1992) や草柳 (2004b) が指摘しているように、加害者自身に問題意識がなく、そのことがDVの慢性化・激化につながったと考えられる。

ある DV をきっかけに、DV に耐えかねたパートナーは加害者と距離を置くための行動を起こした。しかし、4 名中 3 名の加害者がパートナーの様子がこれまでと違うことに気づいたものの、不思議に思うだけで誰も解決に向けた行動はとらなかった。このことは、その時点でもまだパートナーの変化が自分の態度や言動 (DV) によって生じているという認識がなく、DV を軽視していたことを意味する。その後、3 名はパートナーから直接「DV だ」と指摘されたことで、1 名はパートナーからこれまでの不満をぶつけられたことで、自分の態度や言動、パートナーとの関係の中に DV を意識するようになった。パートナーが繰り返し行動を起こしたことで、今まで当然のことと感じてきた態度や言動に違和感を持つようになったと思われる。

2) 葛藤の落としどころを模索する段階

パートナーとの関係の亀裂に DV を意識するようになると、「DV かもしれない」との思いを心の隅に持つようになるが、「DV ではない」と否定したい気持ちも大きく、葛藤が起きた。パートナーの様子に異変を感じていた 3 名は、その葛藤を収束させるため、家族との関係を修復する行動を取り始めた。Riesen (2006) が、加害者が変化するきっかけとなった出来事の一つに「パートナーによって気づかされた体験をしたこと」を挙げている通り、本研究の対象者においても、パートナーの言動が加害者の変化を促したと考えられる。自分の態度や言動について自分で「DV かもしれない」と気づいた者は、DV と指摘されることへの抵抗や葛藤を感じながらも、比較的すぐに自分の態度や言動が DV であると受け止めることができていた。一方で、パートナーから DV を指摘された 3 名は、すぐには自分の態度や言動が DV であることを受け止めることができず、否認、言い訳を探すなどの抵抗を示した。しかし、友人へ相談したり、インターネットで検索をしても、これまでの自分の態度や言動を肯定してくれる情報は得られなかった。代わりに、DV とされる態度や言動に当てはまることを自分がしていたことが分かるが、この時点ではまだ DV であることを受け止めることができず、「DV ではない」と抵抗する気持ちの間で大きく揺れ動いていた。この段階は、Gondolf (1987) の否認の段階に該当すると考えられる。

程度の差はあるが、誰もが現状を変えたい、抜け出したい、自分が変わる必要があるのかもしれないといった気持ちを持ってプログラムに参加していた。このことは、

日本のプログラムに参加する加害者はそれぞれの事情の中で自ら必要性を感じ、自己変革をはかろうとする男性が対象となっているという草柳 (2004a) の指摘と合致するものと思われる。この時点ではまだ「DV ではない」という気持ちは大きいようであったが、否認をしたままではプログラム参加を決断することは難しいと考えられる。本研究の対象者がこの段階にあったときには、自分の態度や言動が DV だったということを受け容れるまではいかないが、少なくとも、これまでの自分の振る舞いには問題があったのかもしれないことを受け止めている状態であったと考えられる。このあたりから、Gondolf (1987) の行動変容の段階、Prochaska et al. (1992) の準備期、草柳 (2004b) の自己否定の時期にさしかかると考えられる。

3) 現実に直面して DV を受け容れていく段階

プログラム参加当初、パートナーから DV を指摘された 3 名は、「DV だ」と指摘されることに抵抗を感じていた。しかし、プログラムで FT や他の参加者に DV を指摘される、自分の考えや態度に共感されない、という経験や、加害者と呼ばれる他の参加者と同じことをしているとといった気づきから、徐々に DV 加害を認識するようになっていった。第三者の視点を得たことで、客観的に自分の態度を振り返ることができ、内省が促されたのではないかと考えられる。また、この段階までに加害者の大半が別居しており、パートナーと距離を置いて冷静に考えることができたことも加害者の内省に繋がったと思われる。

自分に非があったことを認められるようになると、今度は自分の行動や態度を改めようと考え始めていた。特に、プログラム内で学んだ“タイムアウト”を意識して使おうとしている人が多かった。タイムアウトを意識すると、後から自分の攻撃的行動を洞察できるようになり、その頻度が上がることで、自分を抑え込む力がついてきたと実感していた。その実感は、加害者が自分の DV の問題に取り組む意欲へ繋がると考えられる。少しずつ DV への理解が深まり、会社などでも実践できるようになってきたころ、パートナーが再び行動を起こし、加害者は再度現実と直面することになった。

その頃には、加害者は自分の態度や言動が DV であることを認識するようになってきていた。しかし、「いつキレるか分からなくて怖い」と言われてショックを受けたり、家族を取り戻せない理由を考えたりしていることがか

ら(図1-3),その時点でもまだ「大したことはしていない」、「パートナーとの関係もどうにかなるだろう」と、どこか楽観視するところがあったと考えられる。加害者は、離婚や別居を切り出されたこと、パートナーがこれまで抱えてきた思いをぶつけられたことで、自分のDVが引き起こした結果に直面することとなり、「それだけのことをしてしまったのだ」と衝撃を受けていた。現実を突きつけられたことで目を背けていられなくなり、自分の態度や言動がDVだったことを受け容れるという等至点にたどり着いたと考えられる。

また、本研究の対象者が共通して持っていた価値観に、日本における伝統的な家族観があった。これまで聞いてこなかったパートナーの思いを知ることで、家族一人ひとりにも人権があり、大切にされるべきだという認識を持てるようになり、初めて自分の態度や言動がDVであると受け容れることができたと考えられる。このように、これまでの家族観を新しい家族観へと転換することで、加害者はDV脱却へと向かっていくことが示唆された。

4) 家族との関係修復に向かう段階

第4段階は、家族の信頼がなかなか取り戻せないことで更に後悔が深まり、信頼を取り戻すための行動を起こし始める段階と考えられる。パートナーや子どもも、まだ加害者を許すことはできないが、加害者との溝を少しずつ埋めていこうとする動きが出てきていた。加害者がDVを受け容れ、その上で、家族とやり直すために自分ができることを探し、継続して実践をするといった変化が見られるようになったためと考えられる。

少しずつ関係が修復に向かい始めると、早く修復を完了したい加害者は、再同居や面会回数を増やすようパートナーに求めていた。しかし、このことは家族との関係修復を阻害する要因として作用すると考えられる。ゆっくりと安全を確認しながら進みたい被害者にとって、加害者の焦りは自分の気持ちを無視したものと映り、過去のDV体験やこれまでの対等でなかった関係を想起させるおそれがある。そうなれば、加害者は変化していないと判断され、関係修復が遠のくこととなるであろう。

自分の態度や言動がDVであることを受け容れた加害者は、パートナーや子どもたちが再び自分を家族の一員として迎え入れてくれるよう試行錯誤を始めた。全員が感情的になることがDVに繋がると考え、怒りを抑制しようとする傾向があった。中には日常的な感情をもつことも許されないと考え、過度に感情を抑えようとする者

もいた。パートナーとDVのない関係を作るための加害者なりの対応であったが、これは過剰適応とみなすこともできる。また、家族を傷つけた後悔や、家族をなかなか取り戻せない苦しみといった感情に押しつぶされそうになったことへの防衛反応と理解することもできるかもしれない。

一方で、自分の態度や言動がDVだったと受け容れたと思われた後でも、DVを受け容れきれていないと感じる態度を示す者もいた。一旦自分の態度や言動がDVであることを受け容れた後、その状態を維持することが課題になると思われる。

この段階は、Gondolf(1987)の自己変容の段階、Prochaska et al.(1992)の維持期、草柳(2004b)の建設期、再出発期に該当すると考えられる。

2. DV 加害の認識の変化

各段階において、加害者は自分のDVが引き起こした現実を突き付けられていた。加害者はどうにかやり過ぎそうとするものの、次第に目をそむけていられなくなり、これまで思ってもみなかった事実衝撃を受けるとともに、DV加害を認識することで次の段階へと進んでいた。加害者は現実の問題が解決する方向へ向かうようにと行動を起こすが、しばらくすると「そんなにひどいだろうか」とDVを軽視する気持ちも湧いてきていた。しかし、その頃には再び現実と直面し、改めてDV加害を認識することで次の段階へと進むという、まさに螺旋状の過程をたどりながらDV脱却のプロセスを辿っていることが示唆された。この過程は、草柳(2004b)のショック期に類似する出来事が繰り返されているものと考えられる。しかし、第1段階でDVを「意識」し、第2段階で「受け止め」、第3段階で「受け容れる」というように、それぞれの段階では加害者のDVに対する認識に質的な違いがあると思われる。このように段階を追って自分のDV加害を認識していくプロセスこそが、加害者がDVから抜け出すプロセスといえるのかもしれない。

段階を追うごとに、加害者のDV加害に対する認識の質に変化がみられた。そして、時間とともに自分の態度や言動に対する言い訳が減り、自分の態度や言動がDVであることを認める気持ちが強くなっていた。この背景には、自分の態度や言動がDVであると認めることへの抵抗感の低下があると思われる。第1段階ではまだ抵抗感も大きく、DVを「意識する」ととどまっていたが、第3段階では抵抗感が低下し「受け容れる」という認識

ができるようになっていた。抵抗感が低下した理由の一つとして、DV という言葉自体の受け取り方に変化があったと考えられる。一般的に DV という言葉からは「身体的暴力」を連想し、メディアの世界のもの、自分とは縁遠いものというイメージを持ちやすい。そのため、第 1 段階では「そんなにひどいことはしていない」という抵抗感は強いと思われる。しかし、何度も耳にし、DV そのものへの理解を深めることで、DV という言葉が少しずつ身近なものとなり、抵抗感の低下に繋がったと考えられる。また、プログラムで自分の態度や言動について語り、お互いの DV を指摘し合う中で、これまでの自分やパートナーとの関係を見つめ直し、自分の態度や言動への違和感、「DV かもしれない」という気づきを繰り返し得ていった。この繰り返しが DV と言われることへの抵抗感を低下させ、現実と直面した時に DV 加害の自覚を促し、DV を「受け容れる」という認識に至る手助けをしたといえるかもしれない。

本研究の対象者にはプログラムへの参加経験に大きな差があった。しかし全員から、自分の態度や言動が DV だったことを受け容れているとの語りが聞かれた。このことは、プログラムへの参加期間が短くても人によっては内省が得られ、変化がみられることを示唆している。プログラムへの参加期間が最短だった者は、以前から自助グループに参加するなど自分と向き合おうとしていたこと、自分で「DV かもしれない」と感じ始めていたことから、他の参加者と比べて「受け容れる」準備ができていたとも考えられる。一方で長期間プログラムへ参加している者からは「受け容れた」もののまだどこかで完全ではないと感じ、その度に反省するという語りも聞かれた。このように、短いプログラム経験と長い経験では、プログラム参加者に生じていることが異なっていることも予想される。プログラム参加の期間の効果は、今後検討されるべき課題として残っている。

3. 発達障害や精神疾患をもつ DV 加害者

本研究では、対象者の半数が発達障害や精神疾患をもっていた（疑いも含む）。その中には、パートナーとのすれ違いから自分が変わる必要性を感じつつ、DV の原因を症状や特性、それらに配慮しない被害者へと位置づけている者もいた。発達障害や精神疾患が明らかとなっている加害者に対しては、DV を障害や疾患に帰属させないように、支援者はより粘り強く支援していく必要がある。同時に、プログラムと並行して他機関との連携を図

り、精神疾患に対する治療なども行っていく必要があると考えられる。

また、発達障害の特徴の一つとして、内省の難しさが挙げられる。本研究で明らかとなった「DV を受け容れる」という過程について、対象者からは「達成できている」と語られた。しかし、それは表面的理解、つまり「自分の振る舞いが DV と言われるものと合致していたため、自分が DV をしていたことを認識した」と同じ意味であるようにも思われた。内省が困難であるからなのか、内省したことを表現しきれていないのか、まだその段階にいないのか、その理由は明らかではない。けれども、「いつまでたってもこの人は変わらない」と他の参加者や FT から思われやすく、適切な支援を受けられない可能性が示唆された。個人が持つ不適応的な特性によって DV 脱却が困難となっている場合には、支援者の配慮が特に重要になると思われる。支援者は加害者が内省困難である可能性を考慮しつつ、プログラムの内容が正しく認識できているか、日常生活に反映できているかなど個別にも対応し、確認しながらプログラムを進めていくことも必要であろう。一般的なプログラムを実施していくだけで良いのか、今後の課題であると考えられる。

4. DV 加害者に対する支援プログラムの要件

本研究の最終的な目的は、加害者が DV のない関係をもてるよう支援するプログラムにとって必要な点を検討することであった。支援プログラムに参加していた加害者の面接内容を分析した結果、プログラムを組み立てるために留意しなければいけない点について、次のような示唆が得られた。

第 1 段階はプログラムに参加する前の段階であり、いかに参加させるかを考えなくてはならない。そのためには、加害者が自分の態度や言動を DV かもしれないと意識することが重要である。しかし、自分の態度や言動を正しいと認識している加害者が、自ら DV に気づくことは難しい。この段階では、パートナーや友人から DV であると指摘を受けることが効果的と考えられる。パートナーや友人が加害者の DV を指摘するためには、彼らが加害者の態度や言動を DV と認識できなくてはならない。そのためには、彼らに DV の定義や DV に含まれる暴力、DV のサイクル理論などの情報を周知することが必須となる。それを実現させるためには、DV に関する啓発を行い、周知させることが重要と思われる。

DV という言葉に触れる機会が増えることは、DV 被

害者の認識を深めるばかりではない。DV の問題が身近になり、加害者が DV を指摘された時に DV 加害の認識を促す効果も期待できる。すなわち、DV の啓発活動は予防でもあり、加害者支援の始まりでもあるといえるであろう。

一方この段階では、パートナーが DV に対処する際に加害者が感情的になり、DV がより深刻になる可能性もある。本研究ではパートナーによる指摘によって加害者は DV を意識するきっかけを得ていたが、被害者の安全確保の観点からは、周囲が気づき指摘することが望ましい。しかし、パートナーが服従したままでは、加害者も自分の態度や言動に問題があると認識することは難しい。そこで、被害者であるパートナーの安全を守れるような体制を整え、エンパワメントする支援も同時に行っていく必要があると思われる。

第 2 段階では、加害者が自分の態度や言動を DV であると受け止めることが重要であると示唆された。加害者が DV を指摘されて湧き起ってくる混乱や葛藤に向き合おうとすることが、次の段階へと進むポイントとなると思われる。そのためには、やっと加害者に芽生えた「DV かもしれない」という気持ちを後押しする出来事が必要であり、友人や知人、専門家からの指摘や、インターネットなどから得られる DV に関する情報、体験談などが有効となるようであった。本研究の対象者は、プログラムの支援者との面談がプログラム参加につながっていた。まずは周りの支援を得て、プログラム実施施設の門をたたくことが重要であると思われる。そうであれば、加害者が支援者に繋がるために、DV 加害者支援を行う施設があることや、プログラムが実施されていることが、世間に周知されていることも重要となるであろう。

第 3 段階では、プログラムを通して、加害者が自分の態度や言動を DV であると受け止めることが重要であると示唆された。第 2 段階の終わりで自分の態度や言動が DV であることを受け止めても、それらを過小評価し責任転嫁する気持ちが生じると、DV を繰り返すリスク要因となる。どのような理由があろうと、DV は許されるものではないことが理解されなければならない。まずは、DV の定義、DV に含まれる暴力、DV を繰り返す要因、典型的な DV の事例、DV のもたらす影響など、DV に関する一定の知識を得られるような支援が必要であると思われる。プログラムの学びを基にしたグループワークは、加害者が自分を振り返る良い機会となっているようであった。第三者から指摘を受け、他の加害者と比較す

ることで、自分の態度や言動を客観視することができ、DV 加害の認識を促すと考えられる。

また、本研究では DV 加害を認識できるようになった後、パートナーや子どもをどれだけ傷つけたかに気づくことが、自分の DV を「受け容れる」ことを決定づけていた。パートナーや子どもの気持ちに思いを馳せ、その気持ちを受け止められるような支援が重要なかもしれない。

第 4 段階では、パートナーや子どもとの関係修復が思うように進展しないことへの焦りを抑え、パートナーや子どもの気持ちに合わせられるかが重要であると示唆された。加害者にとっては、これまでとは異なる関係の取り方であり、戸惑うことの連続であると考えられる。第 3 段階で新しい対人関係のスキルを習得し、DV を受け容れた加害者は、自分の変化を実感し、家族との関係修復への期待をもっていると考えられる。一方で、自分の DV が家族に与えた影響が想像以上に大きいことを実感する段階でもあるようであった。現実を受け止められるように支援すること、傷ついた家族のために今何ができるかを支援者と共に模索することが必要になると思われる。また、努力がなかなか報われない不安、悲しみ、怒り、焦り、苛立ちといった感情と付き合っていくための支援も必要と思われる。この時、加害者にもあるはずの尊厳や人権がないがしろにされないよう注意されなければならない。このことは、支援を行っていく上で忘れてはならない視点であるといえるであろう。

第 1 段階、第 2 段階は家族や友人からの働きかけを、第 3 段階、第 4 段階は支援者や同じ体験をしている他の加害者からの働きかけを、DV 脱却のための重要な視点として配慮していく必要があると考えられる。

5. 本研究の意義と課題

本研究では、DV 加害者の DV 加害に対する認識の変化に焦点を当てた DV 脱却のプロセスについて、系統的に検討することができた。結果から、加害者は自分の態度や言動が DV であると意識し、受け止め、受け容れるという過程を通して DV 脱却へ向かうことが示唆された。その過程は、自分の DV が引き起こした現実と直面し、衝撃を受け、DV 加害を認識するという過程を繰り返しながら進む、螺旋状の過程となっているようであった。

また、本研究により DV 脱却のプロセスを四つの段階に区分し、各段階の特徴と課題、必要な支援について検討することができた。加害者が DV 脱却のプロセスを辿

るためには、加害者がその時点に応じてできる DV 加害の認識が必要である。DV 加害者支援では、加害者の DV 加害の認識をアセスメントしながら、加害者が現実と向き合っていくために必要な支援を行っていくことが重要であり、本研究で明らかとなった各段階の特徴と課題、必要な支援は、今後 DV 加害者支援を行う際の参考にできると考えられる。

DV からの脱却は、パートナーとの関係を修復し、プログラムを辞めた後も DV のない関係を継続する、または、別離を選択するが、新しいパートナーと DV の無い関係を築き、プログラムを辞めた後もその関係を継続することである。しかし、本研究では DV 脱却途上の加害者を対象としており、DV 脱却となるまでの変化のプロセスについては検討できなかった。また、FT から聞いた対象者の情報と、対象者自身の発言にいくつかの矛盾点も見受けられた。DV を脱却したと思われる加害者を対象とし、対象者の語りが妥当であるかも含めて検討を行うことが今後の課題である。

現在、日本では数えるほどしかプログラムが実施されていない。そのため、支援を受けられない、プログラムに通えないという加害者も大勢いると推測される。DV 被害者救出のためにも、加害者がプログラムなどの支援に繋がれるよう、DV 加害者支援の体制を整えるとともに、プログラムそのものの数を増やすことも急務である。

謝辞

本論文は、平成 26 年度東海学院大学大学院修士論文として提出したものを加筆、修正したものである。調査対象者の紹介と面接場所の提供、DV に関するたくさんの情報を提供してくださった DV 被害者・加害者更正支援団体の代表者様、数回にわたって自身の DV 加害と脱却に向かう過程についてその体験を語ってくださった 4 名の対象者の皆様には厚くお礼申し上げます。

引用文献

- Adams, D. & Cayouette, S. (沼崎 一郎 (訳)) (2002). エマージ—バタラー (DV 加害者) のためのグループ教育モデル— アディクションと家族 19 (2), 205-231.
- Dobash, R. E. & Dobash, P. R. (1979). *Violence against wives: a case against the patriarchy*. New York, The Free Press, Macmillan.
- Dobash, R. E., Dobash, P. R., Cavanagh, K., & Lewis, R. (2000). *Changing Violent Men*. Thousand Oaks: Sage

Publication.

- Dutton, D. G. & Golant S. K. (1995). *The Batterer: a Psychological Profile*, New York: Basic Books. (中村 正 (訳) (2001). なぜ夫は、愛する妻を殴るのか?—バタラーの心理学— 作品社)
- Dutton, D. G., Bodnarchuk, M., Kropp, R., Hart, S. D., & Ogloff, J. R. P. (1997). Wife assault treatment and criminal recidivism: An 11-year follow-up. *International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology*, 41, 9-23.
- Gondolf, E. W. (1987). Changing men who batter: A developmental model for integrated interventions. *Journal of Family Violence*, 2 (4), 335-349.
- Gondolf, E. W. & White, R. J. (2001). Batterer program participants who repeatedly reassault: Psychopathic tendencies and other disorders. *Journal of Interpersonal Violence*, 16, 361-380.
- 深澤 裕子・西田 公昭・浦 光博 (2003). 親密な関係における暴力の分類と促進要因の検討 対人社会心理学研究, 3, 85-91.
- 草柳 和之 (2004a). DV 加害男性への心理臨床の試み—脱暴力プログラムの新展開— 親水社
- 草柳 和之 (2004b). ドメスティック・バイオレンス新版—男性加害者の暴力克服の試み— 岩波書店
- Lee, M. Y., Sebold, J. & Uken, A. (2003). *Solution-Focused Treatment of Domestic Violence Offenders: Accountability for Change*, Oxford University Press.
- (玉真 慎子・住谷 裕子 (訳) (2012). DV 加害者が変わる—解決志向グループ・セラピー実践マニュアル— 金剛出版)
- 内閣府男女共同参画局 (2015). 男女間における暴力に関する調査報告書 http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/h26_boryoku_cyousa.html (2017 年 10 月 3 日)
- 内閣府男女共同参画局 (2016). 「配偶者等に対する暴力の加害者更生に係る実態調査研究事業」報告書 http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h27_report.pdf (2017 年 10 月 3 日)
- 中村 正 (2002). 続・ドメスティック・バイオレンス加害者治療の試み アディクションと家族, 19(2), 195-204.
- 信田 さよ子 (2011). 被害者支援の一環としての DV 加害者プログラム—RRP プログラムワークショップからの報告— NPO 法人 RRP 研究会

- O'Keefe, M. (1997). Predictors of dating violence among high school student. *Journal of Interpersonal Violence*, 12, 546-568.
- Prochaska, J. O., DiClemente, C. C. & Norcross, J. C. (1992). In search of how people change. *American Psychologist*, 47 (9), 1102-1114.
- Riesen, Y. (2006). *Life-course development of reformed martially violent men. Unpublished doctoral dissertation, University of British Columbia, Vancouver, BC, Canada.*
- Stefanakis, H. (1998). *Desistence from violence: men's stories of identity transformation. Unpublished doctoral dissertation, University of Guelph, Guelph, ON, Canada.*
- 武内 珠美・小坂 真利子 (2010). デート DV 被害女性がその関係から抜け出すまでの心理的プロセスに関する質的研究——複線経路・等至性モデル (TEM) を用いて——大分大学教育福祉科学部研究紀要 33 (1), 17-30.
- Walker, L. E. (1979). *The Battered Woman*, Harper & Row. (斎藤 学 (監)・穂積 由利子 (訳) (1997). バタードウーマン——虐待される妻たち—— 金剛出版)
- 山口 のり子 (2001). DV あなた自身を抱きしめて——アメリカの被害者・加害者プログラム—— 梨の木社
- 安田 裕子・サトウ タツヤ (2012). TEM でわかる人生の経路——質的研究の新展開—— 誠信書房
- 横浜市民活推進局 (2008). デート DV についての意識・実態調査報告書 <http://www.city.yokohama.lg.jp/seisaku/danjo/chousa/19datedvcyousa/19datedvcyousa.all.pdf> (2017 年 10 月 3 日)

Breakaway from Domestic Violence Facilitated by the Batterer's Process of Self-Recognition

Hikari Josha¹, Shuzo Ohi² & Kunio Miyamoto³

(1: Kuriki Mental Clinic, 2: Gifu Women's University, 3: Tokai Gakuin University)

Abstract

This study aimed to elucidate how batterers find a way to break away from domestic violence (DV). Four males who attended a program for batterers were interviewed (three men 3 times and one man 2 times), and the data was analyzed using the Trajectory Equifinality Model (TEM) method. The TEM results showed there are four stages batterers pass through when rehabilitating themselves from DV. In the first stage, they continued and repeated DV without recognizing it as DV. In the second stage, they tried to deal with their emotional conflict. In the third stage, they faced squarely what they were doing and recognized it as DV. In the fourth stage, they tried to restore their relationship and communication with their family. When they faced the consequences of what they had done, and became aware that what they had been doing was unnatural, they accepted the impact and pain of DV and were able to initiate the process of breaking away from DV.

Keywords: Domestic Violence, Batterer, Breakaway from Domestic Violence